

の二型がほぼ同数ずつある。この二型の胞子を分離して培養すると、小形の胞子からできた原糸体上には矮雄が形成された。大型の胞子からの原糸体上の植物体は雄よりずっと大形で、これまでのところ生殖器官は形成されていないが、おそらく雌株であると想像される。無性芽は大形の胞子からの原糸体上のみ形成された。以上のように、本種では胞子、植物体共に雌が雄より大きく、さらに雌株のみが植物体にも原糸体上にも無性芽を持つことがわかった。

○マンリョウ、カラタチバナおよびモクタチバナの果実色変り品種の学名 (大橋広好) Hiroyoshi OHASHI: New names for several forms of Japanese species of *Ardisia* (Myrsinaceae)

カラタチバナは花壇地錦抄巻三(1965), 大和本草綱目(1708), マンリョウはシキンジュウの名で増補地錦抄(1710)に既に庭木として栽培されていることが記述されている。橘品(1797), 橘品類考(1797), 素封論(1797)にはカラタチバナの園芸品種が多数図説されている。植物学的には中井(1943): 大日本植物誌カラタチバナ科で初めてこれらの園芸品種の一部, マンリョウの35品種とカラタチバナの64品種, に対して学名が与えられている。しかし, 原(1948): 日本種子植物集覧では僅かにマンリョウについてはシロミノマンリョウとキミノマンリョウ, カラタチバナについてはキミノカラタチバナが認められているに過ぎない。その他に, カラタチバナには白実の野生品シロミタチバナがある。また, モクタチバナにも赤果品アカミノモクタチバナと黒果品クロミノモクタチバナが知られている。これらの色変りは, シロミノマンリョウを除くと, いずれも *Ardisia* のシノニムである *Bladhia* のもとで学名が作られている。杉本(1961): 新日本樹木総検索誌ではマンリョウとカラタチバナの前述の品種に対して *Ardisia* のもとで中井の品種名が使われているが, 正式に発表されたものではない。したがって, マンリョウ, カラタチバナおよびモクタチバナの果実の色変り品種の学名は次のようになる。

1) *Ardisia crenata* Sims f. **leucocarpa** (Nakai) Yamanaka in Journ. Jap. Bot. 41: 278 (1966); Veg. & Fl. Kochi Pref. 335 (1978). シロミノマンリョウ.

Bladhia lentiginosa (Ker) Nakai f. *leucocarpa* Nakai in Nova Fl. Jap. Ardisiaceae 109 (1943).

B. crenata (Sims) Hara f. *leucocarpa* (Nakai) Hara, Enum. Sperm. Jap. 1: 76 (1948).

2) *Ardisia crenata* Sims f. **xanthocarpa** (Nakai) Ohashi, comb. nov. キミノマンリョウ.

A. manryo Siebold in Jaarb. Nederl. Maats. Tuinbow 1848, 46.

Bladhia lentiginosa (Ker) Nakai f. *xanthocarpa* Nakai, l.c. 109 (1943).

B. crenata (Sims) Hara f. *xanthocarpa* (Nakai) Hara, l. c. 76 (1948).

3) *Ardisia crispa* (Thunb.) DC. f. *leucocarpa* (Nakai) Ohashi, comb. nov.
シロミタチバナ.

Bladhia crispa Thunb. f. *leucocarpa* Nakai, l. c. 63 (1943). Hara, l. c. 77 (1948).

4) *Ardisia crispa* (Thunb.) DC. f. *xanthocarpa* (Nakai) Ohashi, comb. nov.
キミタチバナ.

Bladhia crispa Thunb. f. *xanthocarpa* Nakai, l. c. 84 (1943). Hara, l. c. 77 (1948).

5) *Ardisia sieboldii* Miq. f. *rubricarpa* (Tuyama ex Nakai) Ohashi, comb. nov. アカミノモクタチバナ.

Bladhia sieboldii (Miq.) Nakai f. *rubricarpa* Tuyama [ex Honda, Nom. Pl. Jap. 268 (1939), nom. nud.] ex Nakai l. c. 122 (1943). Hara, l. c. 79 (1948).

6) *Ardisia sieboldii* Miq. f. *nigrocarpa* (Tuyama ex Nakai) Ohashi, comb. nov. クロミノモクタチバナ.

Bladhia sieboldii (Miq.) Nakai f. *nigrocarpa* Tuyama [ex Honda, Nom. Pl. Jap. 268 (1939), nom. nud.] ex Nakai, l. c. 125 (1943). Hara, l. c. 79 (1948).

(東北大学 理学部生物学教室)

□Taylor, F. J. R. (ed): **The biology of Dinoflagellates** i-xii+775 pp. 1987. Blackwell Sci. Publ., London. ¥ ca. 29,160. 薬理効果をもつ毒物質の生産、真核と中生核(メソカリオン)の2核の共存、クロロフィル a c をもつなかまのほかにも a b 含有種の存在など、このところ渦鞭毛藻類は話題にこと欠かない。1960年頃から難点が克服され、室内培養が出来るようになり、この生物についての知見は急速に増大した。しかし、原生動物学者、植物学者、地質学者、水産学者それに Protistologists と称する研究者など、携わる人達が多分野に亘ることもあって、渦鞭毛藻類の最近の研究成果を一冊の本にまとめるのは大変むづかしいとされてきた。今回ブリティッシュコロンビア大学の Taylor 教授はよく努力され、第一線で活躍の人達を執筆者に得てこの困難な仕事を成し遂げた。本書を構成する15章は以下のである。1. 概論 (Taylor), 2. 形態 (同), 3. 微細構造 (Dodge, Greuet), 4. 渦鞭毛藻核の生化学 (Rizzo), 5. 光合成 (Prézelin), 6. 従属栄養 (Gaines, Elbrächter), 7. 生体発光と生体リズム (Sweeney), 8. 毒物質 (Shimizu), 9. ステロール (Withers), 10. 行動 (Levandowsky, Kaneta), 11. 生態、海の生態系 (Taylor)。淡水の生態系 (Pollinger), 12. 共生 (Trench), 13. 寄生 (J. & M. Cachon), 14. 生殖 (Pfiester, Anderson), 15. シストと化石種 (Goodman), 付. 分類と分類表 (Taylor)。 (千原光雄)